



東里山人藏作
勝川春好圖画
仕形道
其泉堂

13
1429



13
1.429
巻



清書

仕形落語工風智恵輪序

明治三十九年十月十六日
市島館長氏寄贈



いさぎよい。くちのちあいの
 ちのちあいの。あつらん。ちのちあいの。みちのくち。を
 ちのちあいの。あつらん。ちのちあいの。みちのくち。を
 かぐん。ちのちあいの。あつらん。ちのちあいの。みちのくち。を
 みちのくち。を。あつらん。ちのちあいの。みちのくち。を
 ちのちあいの。あつらん。ちのちあいの。みちのくち。を
 ちのちあいの。あつらん。ちのちあいの。みちのくち。を
 ちのちあいの。あつらん。ちのちあいの。みちのくち。を
 ちのちあいの。あつらん。ちのちあいの。みちのくち。を
 ちのちあいの。あつらん。ちのちあいの。みちのくち。を

Handwritten text in a cursive script, likely a historical record or account. The text is written in a single column on the right page of the manuscript.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical record or account. The text is written in a single column on the left page of the manuscript.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical record or account. The text is written in a single column on the left page of the manuscript.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical record or account. The text is written in a single column on the left page of the manuscript.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical record or account. The text is written in a single column on the left page of the manuscript.



仕形落語目録並道具建

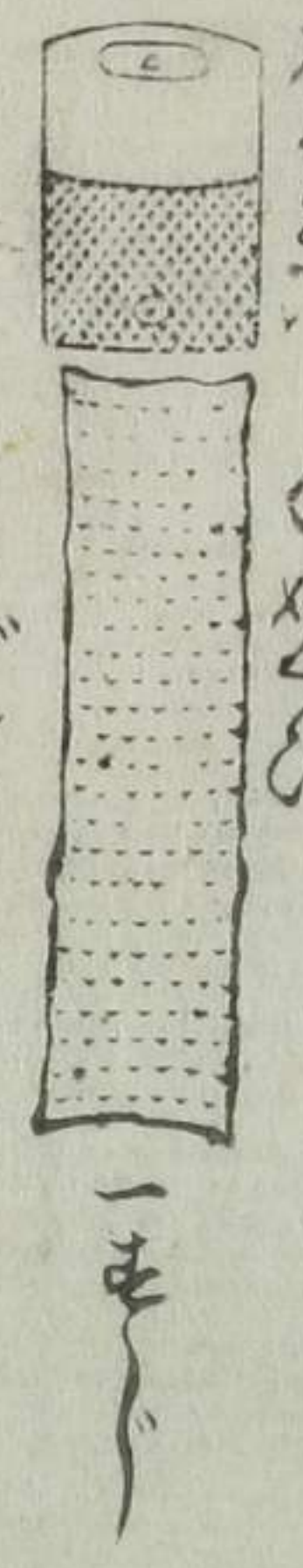
○萬歳の頓智



○文屋康秀の古吏

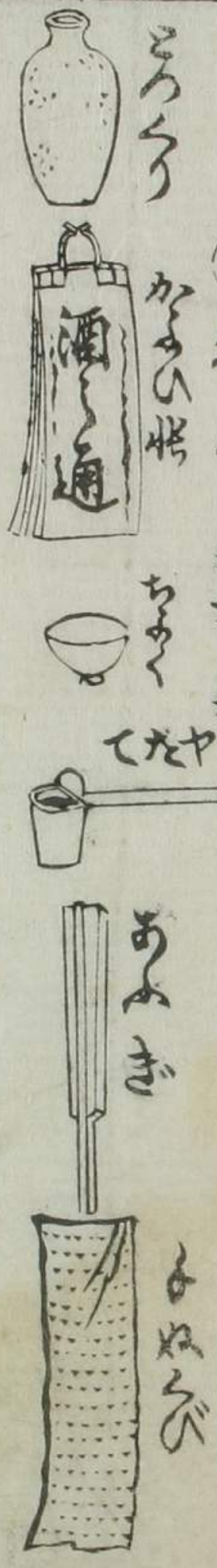
道具立のりも前を用ゆる

○四季の詭望



道具立のりも前を用ゆる但し一ツ添ふ

○獵人の難儀

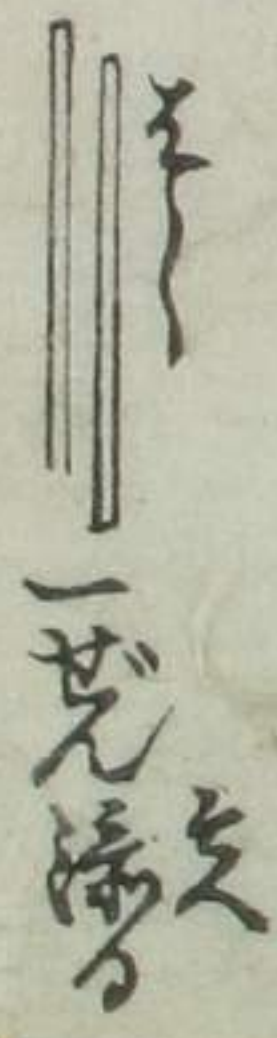


○太神樂の災難

道具立のりも前を用ゆる

○大鶯の發明

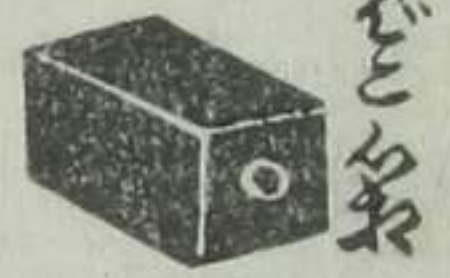
道具立のりも前を用ゆる但し一ツ添ふ



おしなま

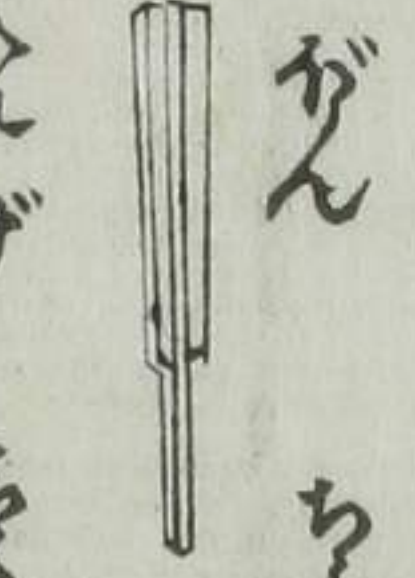
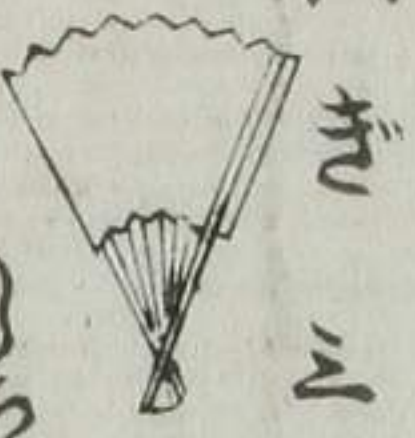
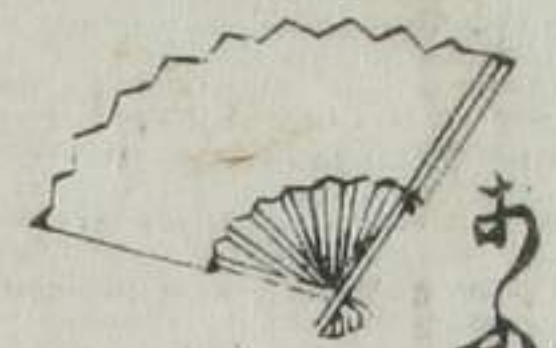


髪製の夜遊
まくら
ちきぎせる



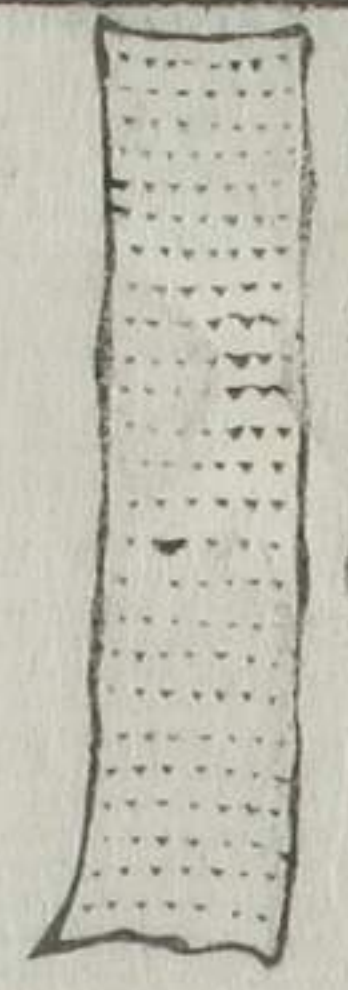
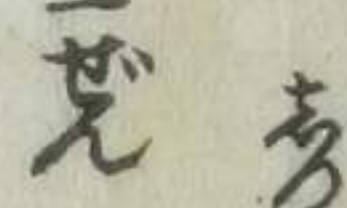
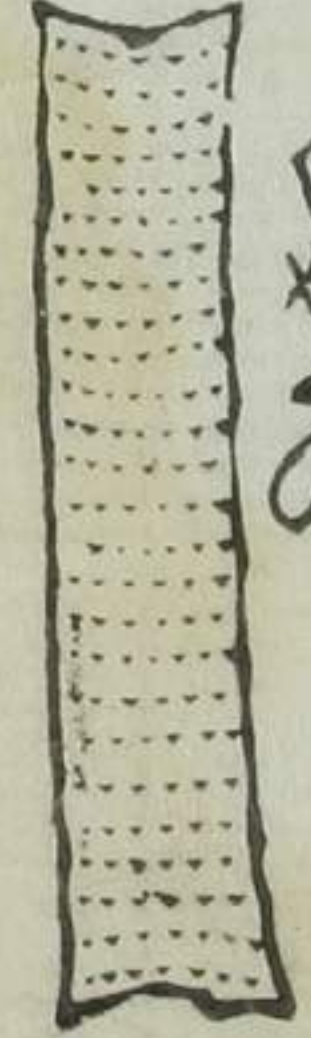
おしなま

虫盡の世界
せう



七変化の石
ちきぎ
ちきぎ
ちきぎ

向島の滑稽
ちきぎ
ちきぎ



以上通計十種
後編卷十五種
稿成
近判

化粧道具や三月の
石他とあか話
○勝手の小道具
忠臣蔵とあか話

道具建目録終

おしなま

おしなま

妻は入難取せあるごとくとありければ五道の冥途へ



養へたる人の死の直早體を焼くれば種生まらざらん

あつとらふ大五然るべ日あるが別後よ死せる者の死骸へ

魂を飯まぐとありたる人。是を醫を穿るもあふ其日を別

九州日向の國の。奪ののわくのやえきと

死せるよやく。渠が死骸へ康秀を難取せある所よ

吉が女がうまよ別悲しむ日。暴入もの水と

手向てあつたるが城の中やとありてあるよ。殺馬たまぐさな



墓を好くえられがまの種生せし小塚。飲ぶるのわざ

あつとらふ吉の忙甚とて。御う後が色あく吉のそよの

夫よめがぶあが共所何国とありて。只管伊勢まのめやう

我妻のよあど。強れよむらうの一回よ合意せむ日向まのと我


家のいぬ。あつとらふ死の終る終るよ。吉の更よ得公せむ只

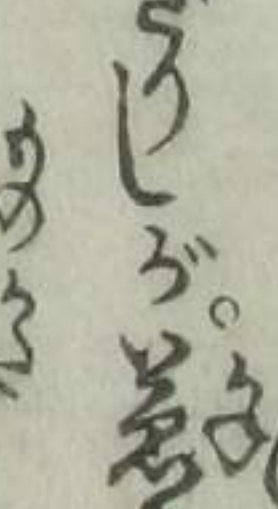
伊勢國のいぬのいぬ。伊勢と日向の物語とありてある。影と吉の女

のいぬ。伊勢と日向の物語とありてある。影と吉の女

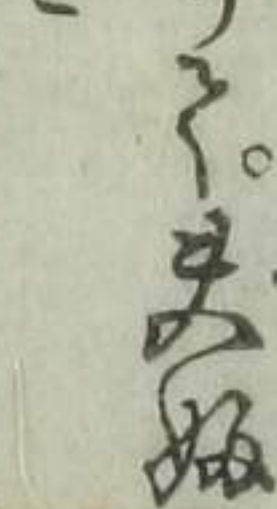
影と吉の女。伊勢と日向の物語とありてある。影と吉の女

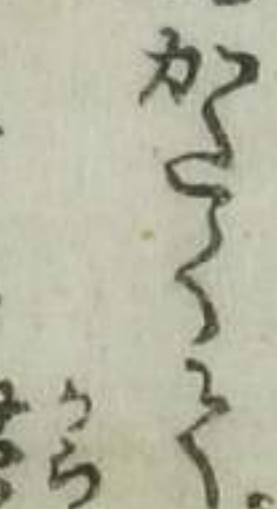


文屋康秀ありとて妻は對面するよ  けぬい

夫の顔も容形の揃も実とも思はざりしが  思ひ

送せるももちたもあはれぬの及ぶと物ゆきまつけ

妻も漸く康秀が後生あたるを察りて  思ひ

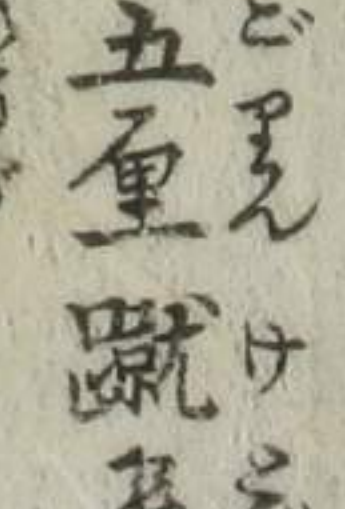
法らざりしとかや日向の女むも  思ひ

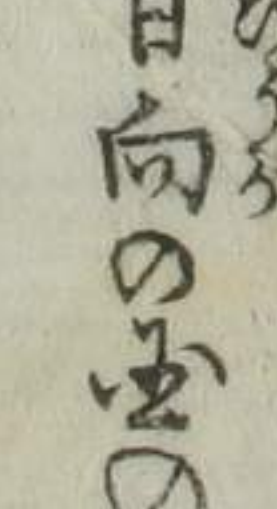
あはれ侍勢ふは任るが素より  思ひ

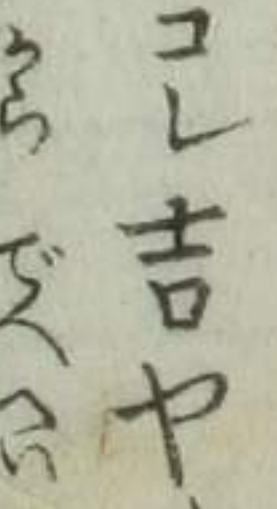
と免は角むら  思ひ

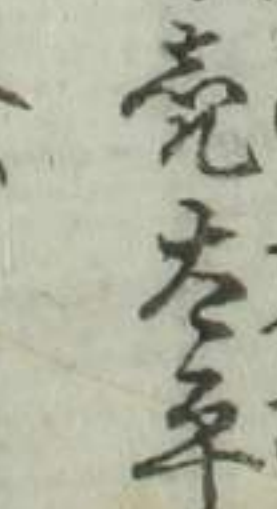
然の二の腕を  思ひ

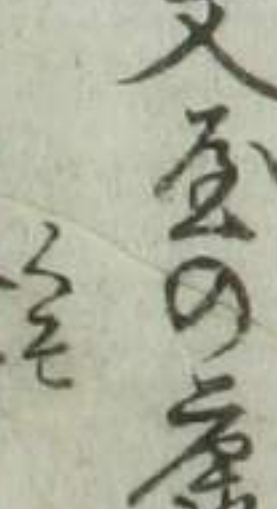


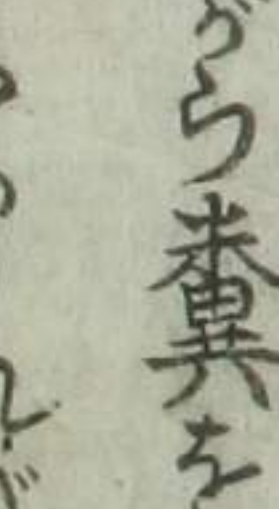
文屋康秀ありとて  思ひ


母のあやの移入  思ひ


糸宮  思ひ

魁飯  思ひ

あつり  思ひ

りぬ人  思ひ

りぬ人  思ひ

風をあら  思ひ

あふあり人の名を銜く。そよひを平をいふんあむの自然の百一首がせめて皆さるる事。

四季の詠事

あづひ月

お終老二月

紙雛四月

そら手

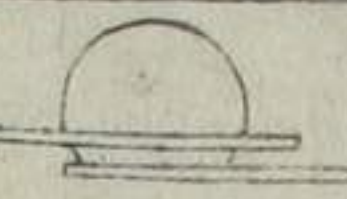
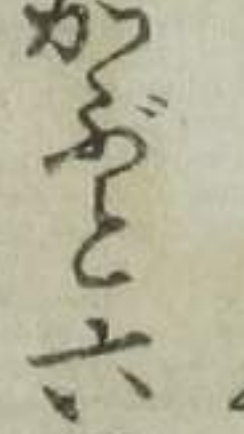
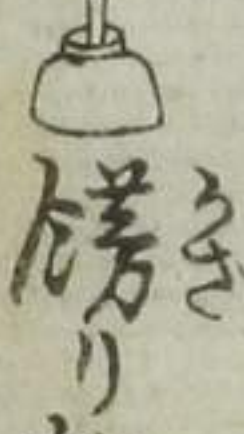
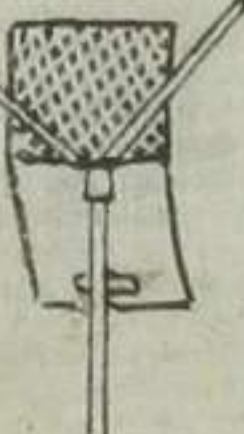
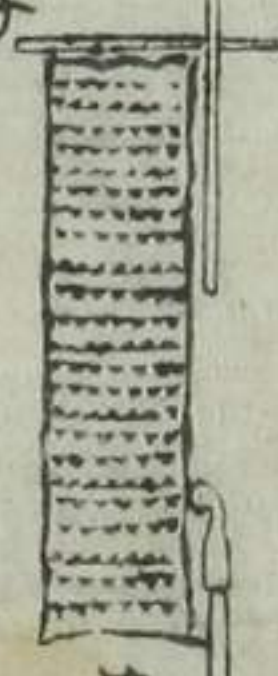
のぞく二月

焼餅六月

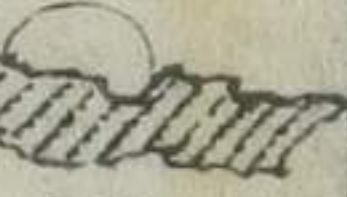
秋迦の誕生八月

焼の竜さて八月

涼と毎七月



月又九月のちろをり



月又十月の



夷

鎌土月



於又世の門者板三

月

三

月

なつみ



節季

の

毎

年

毎

左ねと勢ひよく

挽屋の

又世先へ

踊り

中へ

入る

まがし

鏡室の中へ

落ちて

まがし

の

ちり

り

節季の

ちり

ちり

ちり

ちり

ちり

ちり

ちり

ちり

ちり

ちり

ちり

ちり

ちり

ちり

ちり

ちり

ちり

ちり

ちり

ちり

且ねらぬ有難ごころまの余の踊出るはして巫契室へ
 落ま〜と平巾免りませとゆいよ出ては其まを愕然
 果こしやイ昔の節季ゆが室へ落ると萬やよぬいなあ〜も
 あらよ〜と氣のきつ移入節季ゆごと大づらむりめと呵々
 附られ〜節季ゆも受けぬよあり編笠をかき
 ハイ其然の禍大矣



○ 獵人の難義

○ ちんちんウ。かま焼二まろ
 ○ ほのちんちんウ。中二一かん
 ○ あら二かん。よぬひ一まど

獵人あ山よあ〜と現得のせんと行まよなふ
 間よき〜の如きも一林居るをえとさるそく鉄炮へを
 念あふらちま〜と備をえれば
 林あ〜とい石まあり獵人と息をふるより心敬馬はし恙外出る
 んもあ〜と一ちると言ぎを立帰らんとす於後より
 動くおとろ〜と声うせられて獵人も一ち〜とありまおより
 不安内あ〜と係る編山も存せま〜と運今〜と老父何年のちを
 由助〜と作れよ〜とりの老翁知せま〜と縄ひ〜と引んとま





西 獲之衣は柄香燭を持し僧一人忽ち
 顯色せしむ 我はとて奥山を巡る行者ありその獵人を
 道具を拵奥山に入来せしむる殺生をせしむる
 ぶくもあらばなり子の老僧の言はくは使ひ獵人を道
 立去る諸獵人の危き命を捨ひしも偏に御僧の養あり
 ごとくかの僧を伴ひ杖より下り向ふる酒屋へ亭より
 どの僧も言せおの思も吞く大生醉とあり立あつて酒屋の
 亭に酒の代を貰はんといふは吾の素より獵人あれは徳代も




かついといふといふ然る僧はあつらひをとりては傍もさしひら
 経をよみ鐘をききをとりて取ても附ぬ扶救ひ人
 亭に言ひて心得ぬ友人の奴を酒を吞く其代をかんと
 あらぐ不敵の移致連の僧侶も非敵にあつたるゆゑに
 出来ぬと口功者まふ知でんがし舞人の人遊せしむる
 賣るも多トアをむトをたからぬが



○大神樂の災難のなぐり立を入を用ひ

あつた

上

或御屋敷の御物見中あまのりと申すにあまのり左様申すの丸一いん並うごまりの御おつかひ

えが又またおのおの女中にゅうぢゆうまゝまゝかどかどありありするする男おとこをを見みんんと
 ことしのおもておもてからから遊あそびびするする中ちゆうにに一人ひとりのの御お蔭かげのの立たちち美み容よう
 女中にゅうぢゆうの丸一いんもも見み物ものとと並な並なまりののみみかか外ぐわいをを茶ちや飲いんがが目めななまま
 尚なほとと鼻はなをを押おししよよ盲めくら人ととあありりななれれがが御お屋や敷しきのの氣きのの毒どくははかか
おていああれれはは山さん入いりをを修しゆ身みらられれとと住すみみのの儉けん殺ころももささししつつららささぐぐも
 有ありりがが死し上じやう意いもも名なももそのその怪あやししなな丸まるおおととああびび
 御お屋や敷しきへへ上じやうるるよよ妻つまづづりり御お盲めくら人ひとのの痔じのの毒どくをを御お用ようのの外ぐわい



車留くるまどまりといふいふ河か通とほ立たれれはは突つき当ありりヤヤ何なに奴やつぞぞココレ
 氣きをを附つてて往あ来らいするする盲めくら人ひとはは突つき當ありりといいふふ不ふ持ぢるる奴やつぞぞ引ひ
 捕とらへへるるがが車くるま留どまりののれれゆゆににももほほらら往あ来らいのの中ちゆうににたたららとと
 わわびびとと片かた扱あげげ寄よりりととままををわわららぶぶららぶぶららりりぬぬががああららびびででおおれれ
 ああやあらあんんなな痛いたをを察しへへととららははむむととささすす〜
 いいひひああららびびひひままししよよららのの上うへへ踏ふみみけけのの中ちゆうににああららびび
 轉くるびびヤヤななれれうう投なげげららるるヤヤ腰こしのの骨ほねががぬぬけけとと立たちちままああららぬぬ
 何なにぞぞももココリリヤヤアア口くちははああやあやあ髭ひげももぞぞヤヤイイ爰こゝへへととああららびびととりりああらら

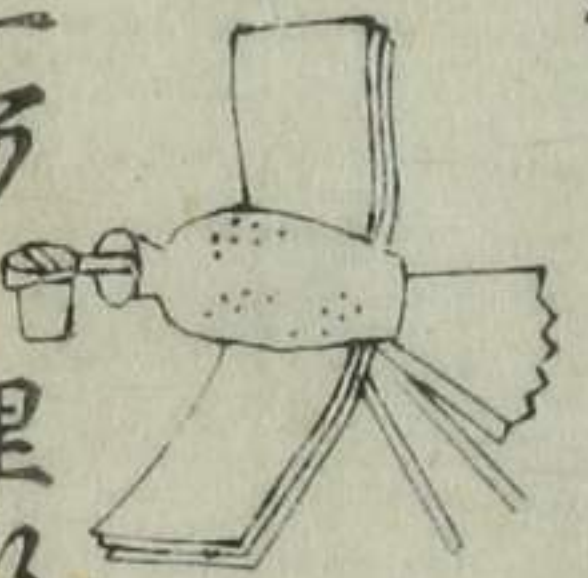


立ても人の居る腰をささうく立ちと思つても痛んでなう
 とあつても困り切て居るを渡る筆舁がらん舟とモ
 かごとやらうとよいさば丸船イヤりふかごまのりいどらん



○大熊の發明

南海の鯨とりふ 魚あり化して 大熊とある
 片舟が千里づ 一とび飛と知る一万 里のりとりふあると記
 大熊の六百萬里の道を飛で南海よりありと記



翼の卵を系臥るゆへ暫く舟を休めんと海上を
 見渡せば最平なる一の島ありたりは飲とびさうそく
 爰より下て二千里余の舟をひろげ快然休息居たり
 所より舟は俄に鳴動して湖はあさぐひ浮びさう海中
 小聲あつと某が脊中へ乗るの陸ぞとつあは大熊と
 大さき驚馬き飛上りて 道を通るればあそそみ六の里
 もあんと見えぬ 蟹虫ありたればさびがの大
 熊も肝を消し熱して 天地の間は我よりあやきある



形容のりのりあつまどを思ひの舟備あそりき光景やと
 舟を縮めくわ海の古巢へ立ちあがりつるこふかの
 大鰐の怖き去るをこんそ吾容の廣大あるを
 或日南海の水底をよまれて東海よあそびけりつるあつそ
 七八百萬里のろを横遠くく大きき豆も勞さなれを
 まど一休まんと海中に浮きある大木の上へ遠のちり甲良
 を就て暫し息を突居る所よ契大木あつる動き
 出してあそびが髪びく歩き入る何奴とりみ声は解虫あつ心敬馬



蟹の

あつて豆を縮め泡を吐おそれ戦慄南海へ逃さりつる
 備け大木とるまへ東海を住居とまぬ海老
 あつてあつる蟹の思ひ去るをそとく
 廣しといえども中く我は勝る形のりのり亦あつまどと
 東海の底深くは遥く向う金殿銀閣
 あつてコハ形き都ありしとかの樓門よまを
 かぎりて肉よ入れば八大龍王の娘をわけてよ出しく羽子をつく
 あつて極先よ子鞠つきく唄うこもあつりつるあつこれハ就



元天地



の樓門

宮城の山月ありりとなきま心を慰めてとある酒店へ立よう
 屠獲のち雲傾むけと抑きごうの胡たびごよま生餅と
 あり真赤ありて拮步行が思ひがままんりの道は草即と
 千ト豆を休めんと大志の上運せり腰をのぞいて居たるよ亦
 声ありとお色があゝへ跨り何奴とらや海老も暫しと
 驚きとが驚を控ておとく我形は勝るりの天化のろふ
 る兒とるある斯いふハ雑とてやありるぞあれくと声
 かられば中から鏡餅ごころ引

○鬢の夜遊 ○ちんちん ○ちんちん ○ちんちん ○ちんちん ○ちんちん

市川團十良夫の根五郎の時用ひ



警あると兒なきととありよとありとと
 大まき 彼を立その行旅を消くふれがかの柳をうら
 角のあせりと兒もあり又馬を通りをかご
 ちてあがまる時もつらとてく 勢き形状
 うま首 せうりあそく如らうのハちんちんあり定めて
 吸つけ なたとを吹樂とての郭通ひもをうらと



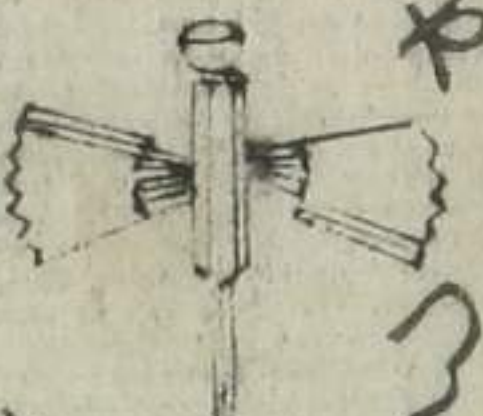
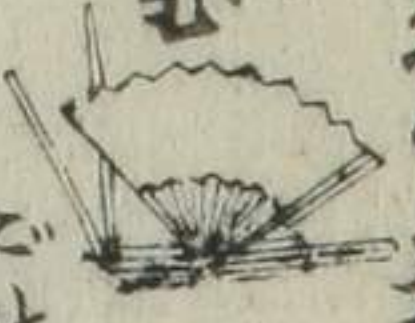
あると死かつらを備ちうく呼ぶだなく冥冥を加へたれば
 娘も面目を失ひやり残もなき仕合あり
 さうあから私子の花街がひの一文も入ませぬと
 團十良嘲笑ひ金銀を持ぎとどろとあつを罵とりび
 ハイハイ〜んか〜と斗さつしつあす



○虫盡の世界 ○あふくニあん ○ちうへーじ

心も身も知る妹の夕暮草葉もまじくゆのま

何となくお衰ふのや 秋の上風もさびくあを命
 と軽と せんが まじぐをまの
 抑らふ五線をわけてまゝ 唇も面白から移がナト今から
 一糸の煙筆を足ふ行んと歩連立と幕の庵ををら
 知れぬ契借をを貸付と横紋をむら せん
 をちもつらも一緒みりて見ん〜トまの撥るまぐら長ひんを
 ほろろひびきを ちがもお出まひさうぐのほしを貸て
 協も一存とありな 廓の鳴柱びのち管をと思ひしよ



振舞月廿日吉日よ移らげ虫をせむしのをまがた
 いしをともるるしふ引の拍子本ききとくしとくまうら
 答屋かゆるよ虫むも物むも耳茶すの

○七変化の所他。九代二郎。ちんばん。ちんばん。ちんばん

酒のまろほ乱はねむるトはとも角酒のころぬ
 むんをききあゝく乱れまじりてあぢりあぢり
 らとあらく三人あきまゝく酒のまじりてあぢりあぢり

これ七変化の所他をくろせんとりあふま
 らけ面白うらうまうあるまじやくとま中まられ東西



まがらまゝのうらうが 寝あぐら宿入り下馬さぢ



あぐら御前イヤハヤ奇妙く



あぐら御前イヤハヤ奇妙く



あぐら御前イヤハヤ奇妙く

その係がかしものこころ

奇妙くその法がたまに〜
かしまおとうコレも

古今奇妙くその法が切替きりかへの伝授でんじゆりのみ

狸せうりの乱みだりやコレの奇代きよしろ〜サア〜狸せうりの
謡曲うたいを唄うたひてら直ただ結むすば不ふ他たが出来できぬを中ちゆう謡うたいを



たのむ〜トのち折お節せう其その席せきよ謡曲うたいを知しり〜若わか者ものが

仕形しがたあ〜ふ〜おまゝそのまゝ酒さけのん〜狸せうり〜よあゝんは

下したと唄うたひたれが狸せうり〜あまれまをまへら〜ふうあんぞ

ヲットこれハちんちんまゝ〜

○向島の滑稽むかひのたわぶ

- とうりり○ちやえん○そ〜一せん
- ちんちんまゝ○ちんちんまゝ
- ちんちんまゝ

路みちが池いけのちやうまは〜後のちにして眠ねむる居ゐる



モウ近きん後のちのよの休やすけ口くちもあ〜偶いふ古道こくどうの市いちへ出でるも

踏ふみを〜あつて損そんをうり致いたす〜まゝ定さだめて泥どろ亀かめ子こあぞん金かね

ぬまあ〜のであらうイハサ泥どろの信まね作わもとんご不ふ景けい氣きぞ

〜ちんちんまゝ〜トまはして居ゐるちんちんまゝ〜

ありて



編 蝸 飛 来 聖 々 安 幼 志 路 考 と 泥 亀 虫 の
川 柳 点 を や ら ぐ 何 を 能 け 後 ち ら ぐ も

半口を^{のせ}貫^{のせ}ひたのイヤ^{のせ}らして身^{のせ}の^{のせ}の述懐を^{のせ}あしサ

それ^{のせ}の面白^{のせ}くも^{のせ}のサ^{のせ}ら^{のせ}く今から新^{のせ}梅^{のせ}中^{のせ}の^{のせ}本母寺

と^{のせ}あ^{のせ}る^{のせ}ま^{のせ}の^{のせ}久^{のせ}和尚^{のせ}の^{のせ}あ^{のせ}う^{のせ}半^{のせ}右^{のせ}清^{のせ}つ^{のせ}で^{のせ}一^{のせ}杯^{のせ}言^{のせ}こ^{のせ}ヤ

志^{のせ}を^{のせ}い^{のせ}ら^{のせ}ぬ^{のせ}是^{のせ}の^{のせ}あ^{のせ}ら^{のせ}う^{のせ}ト^{のせ}路^{のせ}考^{のせ}泥^{のせ}亀^{のせ}編^{のせ}蝸^{のせ}つ^{のせ}と^{のせ}さ^{のせ}く^{のせ}向

島^{のせ}と^{のせ}出^{のせ}る^{のせ}道^{のせ}ま^{のせ}ら^{のせ}法^{のせ}名^{のせ}家^{のせ}の^{のせ}立^{のせ}ら^{のせ}れ

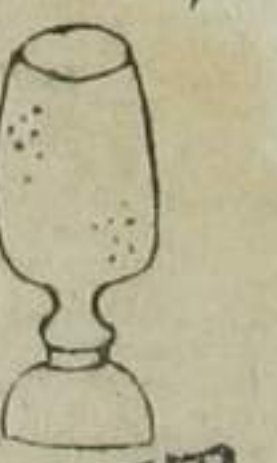
あ^{のせ}ら^{のせ}ひ^{のせ}の^{のせ}狂^{のせ}歌^{のせ}の^{のせ}碑^{のせ}
發^{のせ}句^{のせ}の^{のせ}碑^{のせ}あ^{のせ}ど^{のせ}を



狂歌の碑



發句の碑



碑の銘

新^{のせ}梅^{のせ}の^{のせ}源^{のせ}へ^{のせ}訪^{のせ}を



鯨口のを^{のせ}あ^{のせ}じ^{のせ}て^{のせ}伏^{のせ}拜^{のせ}と

半^{のせ}夜^{のせ}又^{のせ}が^{のせ}亭^{のせ}へ^{のせ}あ^{のせ}り^{のせ}酒^{のせ}を^{のせ}振^{のせ}り^{のせ}と^{のせ}舌^{のせ}を^{のせ}か^{のせ}ら^{のせ}う^{のせ}屋^{のせ}の

景色^{のせ}を^{のせ}あ^{のせ}が^{のせ}む^{のせ}れ^{のせ}バ^{のせ}春^{のせ}日^{のせ}形^{のせ}の^{のせ}石^{のせ}燈^{のせ}を^{のせ}亀^{のせ}も^{のせ}流^{のせ}へ^{のせ}不

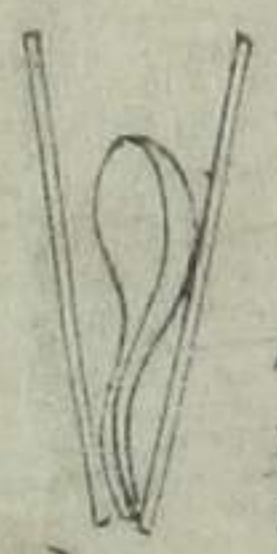
昔^{のせ}む^{のせ}と^{のせ}あ^{のせ}ら^{のせ}う^{のせ}の^{のせ}ま^{のせ}の^{のせ}か^{のせ}ま^{のせ}ら^{のせ}う^{のせ}を^{のせ}い

奇^{のせ}妙^{のせ}と^{のせ}と^{のせ}大^{のせ}ま^{のせ}の^{のせ}あ^{のせ}ら^{のせ}う^{のせ}と^{のせ}醉^{のせ}よ^{のせ}兼^{のせ}て^{のせ}さ^{のせ}だ^{のせ}と^{のせ}ま^{のせ}ら^{のせ}う^{のせ}や^{のせ}ん^{のせ}が

踊^{のせ}上^{のせ}を^{のせ}バ^{のせ}編^{のせ}蝸^{のせ}も^{のせ}お^{のせ}を^{のせ}ひ^{のせ}ら^{のせ}げ^{のせ}と^{のせ}高^{のせ}よ^{のせ}の^{のせ}ま^{のせ}ま^{のせ}ら^{のせ}う^{のせ}ま^{のせ}ま^{のせ}ら^{のせ}う^{のせ}と

御^{のせ}免^{のせ}の^{のせ}か^{のせ}ら^{のせ}り^{のせ}ま^{のせ}と^{のせ}是^{のせ}の^{のせ}あ^{のせ}ら^{のせ}う^{のせ}口^{のせ}上^{のせ}の^{のせ}あ^{のせ}や^{のせ}と^{のせ}ケ^{のせ}を^{のせ}あ^{のせ}ら^{のせ}う^{のせ}あ^{のせ}ら^{のせ}う^{のせ}只^{のせ}今

路^{のせ}考^{のせ}が^{のせ}舞^{のせ}を^{のせ}踏^{のせ}む^{のせ}あ^{のせ}の^{のせ}泥^{のせ}亀^{のせ}が^{のせ}あ^{のせ}ら^{のせ}う^{のせ}米^{のせ}食^{のせ}を^{のせ}あ^{のせ}ら^{のせ}う^{のせ}首^{のせ}尾



よふお淋あまままををれれがががが板い板はのの道みちままりり

法しのの後ご編へんく

繪え本ほん當あ世よ粧ま 再ま板た 式し亭てい三さん馬ま著し 歌か川かわ豊ほう國こく画が

繪え本ほん益えき者しや筵せん 袋ふ入い 東とう里り山さん人じん著し 歌か川かわ豊ほう國こく画が

繪え本ほん岩い磐ばん石せき 同どう 春はる扇せん改かい 東とう里り山さん人じん著し 勝しょう川かわ春はる好こう画が

仕し形かたををままりり終はるる

